四

賀茂川と高野側が合流する今出川橋まで、坂崎磐音と東源之丞は黙々と歩いてきた。

その間にも源之丞は何度も思い吐息をついた。そして、意を決したように言い出した。

「坂崎、そなたにも奈緒どのにも相済まぬことをした」

「東様、あの金は元々西国屋治太夫に工面させたものにございます。悪銭身につかず、これで気持ちの整理がつきました」

「とは申せ、どうするな」

「まずは朝霧楼の楼主どのに会い、奈緒どのに会えないまでも元気でいるかどうを確かめ、その後のことはまた考えます」

「そうか」

と頷く東源之丞に、

「東様、明朝は大阪へお発ちください。東様には国許で御用が待っております」

しばらく沈黙のままに鴨川の瀬音を聞いて歩いていた源之丞が、

「年甲斐もなくつまらぬところに誘った罪滅ぼしじゃ。これからわしも朝霧楼に行って、一緒に頭を下げよう」

「これからでございますか」

「遊里ではまだ宵の口じゃ」

二人は足を速めた。

鴨川の左岸を下った二人は、四条大橋を渡り、東西に走る四条通りを進むと、大宮通りの角で南に曲がった。さらに西本願寺の辻を花屋町通りに曲がれば、遊里に突き当たる。

島原遊郭に近付くと弦楽の調べが通りに流れてきた。

明の妓院の制を移したものが島原遊郭の基になり、後年、江戸に吉原ができるとき、島原の制度や習わしがそっくり模されたという。

東口に立つと真ん中に大通りが東西に抜け、その左右に三筋の小路が交差していた。

左手には上之町、太夫町、揚屋町と奥へ続き、右手は中之町、中堂町、下之町と小路が交差しているせいで、俗に三筋町と呼ばれていた。

吉原の名物となった張り見世、花魁道中、夜見世、紋尾なども、この京の習わしが始まりで吉原に伝わったものだ。

ちなみに島原の遊女の最高位の太夫を座敷に呼ぶとき、揚げ代銀七十六匁、貰い引きに二十四匁がかかった。この貰い引きというのは、揚屋に払う代金であった。

揚屋の朝霧楼は、太夫町の角、上之町と向き合うように堂々とあった。

東源之丞は、玄関に遣り手を呼び出すと、西本願寺の納所の親恵の手紙を出し、

「野暮用じゃ。すまぬが楼主どのに取り次いでもらいえぬか」

と懐に二朱を落とし込んだ。

遣り手はじろじろと二人の風采を見ていたが、手紙に目を落として確かめると、

「書き入れ時分どっせ」

と嫌味を一つ残して中に消えた。しばらく二人は待たされた。

刻限は四つ前であろう。

酒と脂粉の香りが弦楽の調べに載って通りまで流れてきた。

磐音は、このような里に奈緒がいると思うと胸が締め付けられた。だが、今の磐音はなんの役にも発たない木偶の坊に等しい。

「お西さんの親恵様の紹介やおよって、断りもできんやろと、旦那はんも女将はんもお待ちだす。あんたら、こっちに来なはれ。そう長居はあきまへんえ」

遣り手は釘を刺すと二人を細い路地奥へと連れ込み、勝手口から台所に入れた。板の間では、お豆さんとも呼ばれる童女が擂り鉢で胡麻を擂らされていた。

その板の間の奥に帳場が続いて、磐音たちはそこへ招じ入れられた。

「ご商売の刻限に相済まぬ」

「親恵様の仲介や、断るわけにもいきまへんよってな」

福々しい顔の下に厚みのある胸の女将およしが、煙管に刻みを詰めながら言った。

「関前藩のご家中やそうな。どないな用事だすな」

女将とは反対に小柄な主の九兵衛が二人に訊いた。

「つい最近のことじゃが、長門の赤間関から奈緒と申す女が身売りしてきたと思うが、確かな」

東源之丞が訊いた。

「赤間関から女がな……」

と応じた九兵衛が、

「おまえ様方とどんな関わりがございますのんや」

と訊いた。

「ここに控える坂崎磐音の許婚にござってな。いや、これにはいささかの仔細がござる……」

源之城尾が早口で仔細を述べ立てた。

「なにっ！このお方は、身売りされた許婚を長崎、小倉、赤間と追ってこられましたんか」

女将のおよしが呆れたように言った。

「さよう。できれば、身請けしたく思うてな」

「身請けと申されても、そないに転売されたら、えろう高くなってますやろ」

と二人の懐具合を見透かしたようにおよしが続けた。

「主どの、女将どの、奈緒どのはこちらにご厄介になっておりましょうか」

磐音が訊いた。

「それを聞いてどうなさる気や」

「元気なれば、それがし、こちらを立ち去り、金の工面を考えとうございます。奈緒どのはこちらにおるのでございますか」

磐音は揚屋の主夫婦を見据えた。

ふうーっ

とおよしは煙管を吐き出した。

「一日違いやったな」

「どういうことでござるか」

源之丞が急き込んで訊いた。

「確かにな、赤間関から男衆に連れられて奈緒という女がうちに来ましたがな。一目で気に入りましたえ。あれは天神、太夫になる上玉だしたわ。そんでうちではえろう高い買い物をしましたで」

磐音が九兵衛に訊いた。

「いくらでございましたか」

「八百両や」

「は、八百両……」

東源之丞が呻いた。

「そやけどな、偶然のこっちゃ、さる侍屋敷のお重役が帳場に座っていた奈緒を見られてな、一目で気に入りましたんや。金はいくらでも出す。それがしが身請けするとやいのやいの言われましてな、強引に連れて行かれましたんや」

「どちらの藩にござる」

東源之丞の言葉をおよしが煙管で制し、

「あほなことを。女の売り先なんぞ言えますかいな」

と躱した。

「ならば、いくらでお売りなされた」

「うちにはたったの数晩しかおらんやってな。座敷にでたわけでもなし、千両にございました」

源之丞が声を出して呻いた。

八百が千両に化けたと言った。

「主どの、女将どの、この通りにござる。身売りされた先のお名前を空かしてもらう分けには参りませぬか」

東源之丞が、がばっと畳に頭を擦りつけると頼み込んだ。

「商いには約束事がおますんや。これおを破ったら、かような商いは立ちゆきまへん」

九兵衛が引導を渡すように言った。

「どうにもならぬか」

なおも頭を擦りつける源之丞の背に手をかけた磐音は、

「東様、もうようございます。無理な願いにございました」

「坂崎」

と頭をあげ、視線を向けた源之丞に、

「参りましょう」

と磐音は立ち上がった。

「お侍、いったん身売りされた女を請け出すのんは、至難の業にございます。まして奈緒は千人に一人、や、万人の一人の上玉や。この世界が手放すもんだすか。諦めなはれ、分相応の女を見付けなされ」

主の言葉に源之丞が、

「おのれ！おとなしく頭を下げておれば、さような侮蔑で吐きおって」

と憤るのを、磐音は諭すように台所から裏口へと連れ出した。すると擂り鉢で胡麻を擂っていたお豆さんが二人を気の毒そうに見た。

東口を出た二人の背に晩秋の夜風が吹き付けた。

柳の枝が寂しげに揺れていた。

「くそっ！小馬鹿にしくさって！」

源之丞が吐き捨てた。

「遊里の者は情がないな、坂崎」

「いえ、遊里の者だけではありませんよ」

「どういうことだ」

「主夫婦はわれらが行くことを承知していたのです」

「そのようなことがあろうか」

「では、なぜ、われらが豊後関前藩の者と知っていたのです。東様、藩名は申されませんでしたし、親恵様の紹介状にも藩名の儀は御容赦くださいと再三願われました。

「とするとだれが」

「ですから、親恵様が、朝霧楼にわれらが訪ねることを知らされたのですよ」

「なんだと、あの糞坊主が……」

「仕方ありませぬ。こちらは金のあてもなく訪ねていっただけですから」

「坂崎、昔、大阪でな、京の者を信用するとばば見るでと忠告されたことが合った。ほんとのことじゃな」

呆れたように言い、源之丞が虚脱した。

「西本願寺に乗り込んでも無駄かな」

「無駄です。旅籠に戻りましょう」

二人が四条河原町へと足を向けたとき、

「すいまへん」

という幼い声が背でした。振り向くと、朝霧楼の台所で擂り鉢を擂っていたお豆さんが立っていた。

「なにか用事か」

「坂崎磐音様にございますか」

「聞いておったか」

お豆さんは、首を横に振った。

「奈緒様からお聞きしましたんどす」

と応えた童女は懐から舞扇を出して広げた。

常夜灯の洩れる明かりに、秋景色の山寺の山門の下に若侍と少女が立っている風景が描かれていた。

若侍の手には閼伽桶があり、少女は黄菊を胸に携えていた。

石段の左右の楓や紅葉は、色鮮やかな秋の色に彩られていた。そして、二人の回りの秋茜が飛んでいた。

豊後関前藩の泰然寺に彼岸のお参りにでかけたときの、磐音と奈緒の姿だ。

飛べ飛べや　古里のそら　秋茜

「この方は、坂崎様やな」

「いかにも。それがしの名を奈緒どのが教えたか」

「あい。今日の昼下がり、慌しゅうお発ちになるまえに、世話になったとくれはりましたんや」